

第3回 将来ビジョン検討会議 森田氏スピーチ概要

「人口構造の変化と日本、福井県の課題」

- ・今後の政策課題の一番大きなテーマである人口の高齢化問題について、日本全体、さらに世界を含めてどんな性質を持っているかをお話させていただく。これから福井県の総合的な計画を考える場合に、そういう世界的な、あるいは日本国内のトレンドを踏まえたうえで議論されるのが望ましい。
- ・高齢者がだんだん増えていくことで、社会保障負担や医療費が増えていくことが課題になっているが、現実を見ると、特にこれから日本が直面するであろう大きな課題は都市部の高齢化である。
- ・2005年の国勢調査をベースにした50年後までの人口推計によると、2005年段階で65歳以上の方が人口の20%を占め、2030年になると32%で3分の1になり、2055年では41%と、40%を超える。その中で75歳以上の方が今はまだ高齢者全体の約半分(9%)ぐらいだが、2030年には20%、2055年には27%で、総人口の4分の1になる。
- ・また、2055年には100歳以上の方が60～70万人。鳥取県の人口が60万人を切り、100歳以上が一県の人口に匹敵するくらいになり、想像を超えたものになる。
- ・高齢化を率で考えると上がっていくが、社会福祉や社会保障サービスの対象として考えるとき、それは絶対数の問題である。2100年までの高齢者の絶対数の推計をみると、2040年がだいたいのピークで、ここをどう凌ぐかがこれからの日本の高齢化の問題となる。
- ・世界の主要国の高齢化率をみると、日本は世界と比較して突出した急カーブとなっており、2050年には、人類で初めて40%もの人が65歳を超える。しかも、小規模な国ではなくて、今の時点で人口1億人を越える国で起こってくる。これは人類初めてで、これに対してどのような形で現在の社会の状態を維持していくかが大きな課題である。
- ・先進国は平均寿命が長く、途上国は意外と短いのではないかという予測がある。2007年のデータによると、確かにアフリカの発展途上国は低いですが、だいたい世界の国のどこを取っても平均寿命は60歳を超えている。したがって高齢化の問題は、世界の医療の普及にもよるが、世界的な問題として起こっている。
- ・今後日本だけではなくアジアで高齢化が進み、平均寿命が伸びてくる。特に20

07年で、平均寿命は73歳であるが、中国の高齢化は今年（2010年）から急速に進みつつあり将来的に世界的な課題になる。

- 世界の傾向として、中国の高齢化は世界的な課題となるが、よその国のことだと簡単に片付けることはできない。人口が日本よりも多いバングラデシュ、パキスタン、ナイジェリアはまだ高齢化が進んでいないが、だんだん進んできた場合に世界全体として食料の問題、医療の問題等が発生してくる。
- 日本の中でも高齢化の問題は分布、速度が地域によって違う。これまでの高齢化はどちらかというと、都市部以外で起こり問題になっているが、今後都市部において、これまでの比ではないような速度と規模で起きてくる。福井県の場合は2020年ぐらいをピークに横ばいになり、だんだん減り始める。
- 高齢化は絶対数で見ると限りはピークがあり、ピークをどう乗り越えるかが課題になる。ずっと右肩上がりで行くのでは決してない。
- 都市部の高齢化は、高度成長期に地方から来て住み着いた団塊の世代がリタイアをして高齢者世代に入ること。居住の形態や地域社会へのかかわり方が農村部とはかなり違う。端的に言うと、団地で暮らしている単身、または夫婦二人が多く、現役時は、地域の中で暮らすというよりは、首都圏で働いていたことである。そういう意味では、これからの高齢化社会を支えるコミュニティと言っても、もともとその地域に貢献しうるようなコミュニティが必ずしも存在していなかったと考えられる。
- 高齢化の進展と地方財政の関連性を考えると、都市部の団塊の世代の方は高所得を得て、かなりの額を納税していた。その中から地方税により地域の財政を維持、また、国税として納税した分も、原資として地方税に回っていた。
- しかし65歳になり所得税が減り、75歳になると社会保障関係の負担が相当急速に増えてくる。それをどう賄っていくかを、地方財政を考えるうえでかなり重要な問題として受け止める必要がある。そのことは当然ながら都市部の問題だけではなく、国税の部分は地方交付税へも影響があり、そのことも考えていかなければならない。
- 厚生労働省のデータからとった「年齢階層別 医療・介護・健康人口」によると85歳を過ぎると半分以上の方が何らかの形で医療、介護のお世話にならざるを得ないが、65歳以上で健康な方は多く、80歳前半でも健康な方はかなりいる。この方たちのエネルギーを社会的にもっと活用する仕組みを作る必要がある。
- ただ、元気と言ってもやはり体力的には若い世代とは違い、感覚能力、認知能力の低下はやむを得ない。この世代の方が社会で快適に暮らせるように社会の在り

方、仕組みそのものを変え「高齢者標準の社会」というキャッチフレーズで売り込んではどうか。

- アジアの国々は将来に備え、先頭を切って高齢化を向かえる日本がどういう形で国づくりを行うかに大変関心を持っている。うまくいかなければ、反面教師として学習をしようという視点で見ている。日本は成功させなければならず、それがビジネスモデルになって、商売の観点からいってもアジアに普及させる力と可能性があるのではないかと思う。高齢化に対してそうした認識と発想で考えることがポイントになる。

以上